

研究の概要

(1) 研究主題

**相手意識をもって聞き合い伝え合う子を育む
～友達とのかかわりを通して 思考を深める授業づくり～**

(2) 主題設定の理由

本校では、これまでの研究で、蝶屋モデルをベースに三角ロジックの手法を用い、学習用語やキーワードを指し示しながら根拠や理由を明確にして自分の考えを表現してきた。また、蝶屋モデルにある「学び合う」に重点を置き、友達と関わる機会を多く設定し、思考力・判断力・表現力の育成に取り組んできた。その結果、友達の前で自分の考えや意見を発表する児童が増えてきた。しかし、授業の交流において、課題の解決に向かって仲間とともに学び合うなど、相手意識のある学び合い・伝え合いを十分にできているとは考えにくい。また、学びの土台となる話す力、聞く力、語彙力にも個人差が見られ、その中でも特に「聞く力」が十分身につけていないことが、本校研究会の中でも話題として挙がっている。そこで今年度は、蝶屋モデルをベースに、学びの土台となる力として「聞く力」に重きを置き、発信するとともに受け入れることを重視した研究を、進めようと考えた。

以上のことを踏まえ、研究主題を「相手意識をもって聞き合い伝え合う子を育む 友達とのかかわりを通して 思考を深める授業づくり」とした。昨年度までの研究を受け継ぎ、主題に「聞き合い」という言葉を追記し、「聞く力の育成」を意識した研究を進めていく。そして「聞き合う」ことを大切にしたい授業づくりを進めていきたい。

研究を通して、学校教育目標の「感謝の心をもとに、かかわりの中で自己を高める、たくましい児童の育成 ～安心・安全な学校づくりを通して～」の具現化に努めていきたい。

(3) 研究仮説と視点

研究仮説

- ・ゴールの姿にせまるための目的を明確にした交流をすることで、相手意識のある関わり合い、学び合いをすることができるだろう。
- ・蝶屋モデル「学び合う」段階において、聞くことに関する自己評価の工夫を行うことで、聞く力を高め、聞き合い伝え合う姿がより洗練されるであろう。

(4) 研究の重点

学習スタイル「蝶屋モデル」の中にある、学び合う時間に焦点をあて、その中で2つの重点を設定し実践していく。

- ・重点1「ゴールの姿にせまるための目的をもった交流活動の工夫」
- ・重点2「本時における聞く姿」

○学習スタイル「蝶屋モデル」にある「学び合う」時間と重点とのかかわり

つかむ 課題をつかむための手立て

- ・前時の学びをつなげる（単元のつながりを意識した課題設定）
- ・ゴールをイメージさせる（本時や単元のゴールの提示）

考える

考えをもつための手立て

- ・根拠（言葉・文・絵・図・表・実物）に線を引く
- ・ノートに根拠・理由を書く

学び合う

目的をもった交流にするための手立て

- ・目的を明確にした交流場面の設定 **重点1**
- ・自信をもって伝えるために話型の継続指導
- ・聞き名人揭示の活用
- ・思考を深めるための発問・教師の問い返し
- ・ペア・グループ学習による問題解決
- ・タブレットやホワイトボード、ワークシート等の活用

交流メニュー	
スタイル	目的
グループ ペア クラス	見つける 知る 増やす 比べる 深める

まとめる

学びを確かにする活用・ふりかえりの場

- ・課題とまとめの
- ・学習用語を用いたまとめ
- ・どんな力が身についたかを中心に、ふり返りを書く
- ・適用（本題と同程度か軽程度の練習問題で鍛える）
- ・活用（活用できる場면을問う）
- ・自分のことばで「まとめ」「ふり返り」
- ・本時における聞く姿 **重点2**

相手意識のある聞き合い、伝え合いをしよう 名前（ ）				
観点	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
聞く				
話す				

○重点1「ゴールの姿にせまるための目的をもった交流活動の工夫」

「学び合う」時間において、交流の目的を明確にするために「交流メニュー」を活用する。交流メニューには、話し合いのスタイルと目的があり、「どんなスタイルで交流するのか」「何のために交流するのか」という二つの項目を児童と確認し、共有しながら授業を進めていく。交流メニューは、視覚的に捉えることができるので、目的を共有しやすい良さがある。

目的を共有する際に、「深める」や「比べる」等、児童が予め分かるような目的カードを使用する。目的カードは、教師が準備した物が主であるが、授業の流れとクラスの実態によって、増えていくことも考えられる。授業の中で、「どんな目的で話し合いをするのか」という事を児童と共に問い続ける事で、新しい目的が積みあがっていくことを期待したい。

一方、交流が機械的に行われる状況は避けなければならない。交流することが目的にならない為に、児童が「話し合いたい」「友達と比べてみたい」等、意欲的に交流ができるよう、手立てを工夫していく。

○重点2「本時における聞く姿」

日々児童の聞く力の高める指導を積み重ねていくが、常にめざす具体の姿をイメージして指導をしていくことが重要と考え、重点2として、「本時における聞く姿」を設定する。

児童は自らの聞く力や話す力を、「ループリックによる自己評価」でメタ認知し、そのレベルアップを図る。教員も同じループリックを使い学級の様子を自己評価することで、児童の現在のレベルと躓き具合を把握し、「めざす聞く姿」になるための手立てをとる。それを繰り返すことで、児

童の聞く力が向上し、より相手意識をもって聞き合い伝え合う姿になると考える。研究授業の際にも、児童の聞く姿が目指すものになっていたのか、という視点を大切にしていきたい。

ループリックは、教員が児童の実態に合わせて作成するが、児童と共有し、適宜修正・更新を行う。また、ループリックによる自己評価は単元の終末や聞く力を意識させたい時間に行い積み重ねていく。

(5) 本校の取組み

①授業力向上について

個々の授業力を高めるために、学年会や校内研などにおいてコミュニケーションを図り、共通実践できるようにする。また、授業改善を図るために、学年の壁を越えたフリーの授業参観、職員室での情報交換など、若手もベテランも関係なく、いつでもどこでも学び合える環境を大切に、全職員で授業力向上や授業改善を行っていく。

②ICT活用・タブレットを使った授業の取組

ICT活用において、各学年でつきたい力を校内で設定し、ICTサポートと連携し、共通理解を図る。また、さらにICT活用を進めるために、タブレットを使った授業実践をTEAMS等で共有したり、学年会で使用場面を確認したり、ICT校内研修会を実施したりしていく。先進校の取組も活用しながら授業の効果的な利用を進める。

③朝学習の充実

朝学習では、「音読タイム」「知る知るタイム」「読書」「eライブラリー」の時間を設定する。「音読タイム」は、声に出して読むことを大切に、自信をもって発表する力につなげたい。「知る知るタイム」は、新聞の切り抜き記事を読んだり、記事に対する考えを述べたりする時間であり、児童の知識の幅を広げたり、自分の考えを持ったりできるように取組む。「読書」の時間は、自分の興味のある本を読んだり、国語科に関連する本を読んだりして、児童の興味・関心を広げられるようにする。「eライブラリー」では、個に応じた学習を進めたり、苦手とする学習は何なのかを児童が自覚しながら学習したりさせる。

④学習規律の定着

学習規律を定着させるために、「ノートの書き方」の提案や「学習用具の確認」(4・9・1月)を行う。また、話し方・聞き方のスキルを定着させるために、話型を掲示し活用する。さらに、ユニバーサルデザインを意識した教室環境を整えるための共通実践を行う。

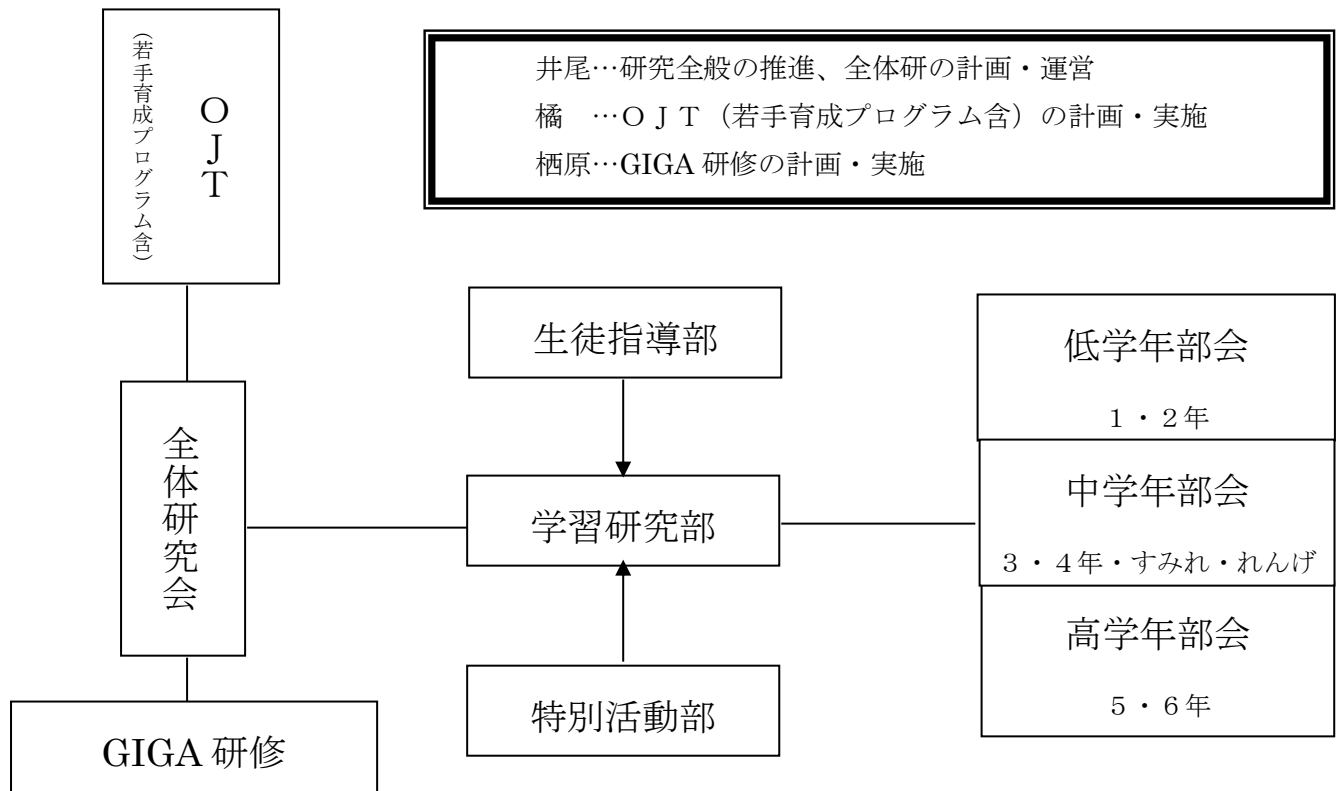
⑤家庭学習の習慣化

家庭学習が定着するために、「家庭学習の手引き」を作成し保護者に配布するとともに、「家庭学習バッチリ週間」(5・9・1月)を設定し、家庭学習の意識付けを図る。

⑥読書活動の促進・充実

読書活動が充実するために、年間の目標読書数を設定し、児童の意欲付けを図っている。また、授業と関連した並行読書を実施したり、家庭読書の日を設定(毎月23日)したりするなどし、児童が本に親しみやすくなるための工夫を行っている。

(6) 研究組織



	全体研究授業	ブロック研究授業
1年(2)	橘	栖原
2年(2)		忍久保 石原
3年(2)	新家	山根
4年(1)		西岡
すみれ		高
れんげ		
5年(2)		能村 仁野
6年(1)	井尾	
級外(1)		岸本

※ 全体研は、低、中、高（れんげとすみれは中に所属、級外は学年付き）各1名行う。

その他の学級・級外はブロック研を行う。また、全体研のみ事前研と当日ともに指導主事を招聘する。